

主題文の意味解釈

語用論的推論と語の文法的情報の相互作用

黒沢晶子 (ロンドン大学)

本稿では、主題名詞句と述部との間に格関係の対応のない主題文を、聞き手がどのようにして理解するのかのプロセスについて考える。語の持つ文法的情報と語用論的推論によって話し手の意図する命題の復元が可能であること、また復元には限界があること、及び題述関係の本質について述べたい。

1. 主題名詞句と述部の関係¹

主題文の中には、以下の例文(1)~(8)のように、何らかの形で、「は」で示される主題名詞句と述部との間に格関係の対応のあるものと、(9)~(11)のように、そうした関係にもどすことのできないものがある。(分類は野田1996による) まず、(1)~(4)は、無題文の格成分そのものが主題になっている。

		主題
(1)	父はこの本を買ってくれた <u>父</u> がこの本を買ってくれた	格成分(ガ格)
(2)	この本は太郎が書いた 太郎が <u>この本</u> を書いた	格成分(ヲ格)
(3)a	植物園には、シーボルトが日本から持ち帰ったイチヨウがある	格成分(ニ格)
	シーボルトが日本から持ち帰ったイチヨウが <u>植物園</u> にある	
	b この駅は、特急が止まる。 特急が <u>この駅</u> に止まる。	
(4)a	グローブ座では「リア王」が上演されている	格成分(デ格)
	「リア王」が <u>グローブ座</u> で上演されている。	
	b 会場は、余興が始まっている。 余興が <u>会場</u> で始まっている。	

しかし、一見そのように単純には見えない(5)「象は鼻が長い」も、無題文「象の鼻が長い(こと)」の格成分「象の鼻が」の連体修飾部分である「象の」が主題となっていると見る(三上1960)ことによって、主題の文構造上の位置が明らかになる。(6)~(8)も同様に、格関係にもどすことができる。

		主題
(5)	象は鼻が長い <u>象の鼻</u> が長い	成分の連体修飾部分
(6)	かき料理は広島が本場だ 広島が <u>かき料理</u> の本場だ	述語名詞の連体修飾語
(7)	辞書は新しいのがいい 新しい <u>辞書</u> がいい	格成分の被修飾名詞
(8)	花が咲くのは7月ごろだ 7月ごろ <u>花</u> が咲く	節(分裂文)

ところが、(9)~(11)は、そのような格関係に立つ無題文を作ることができない。これを野田(1996)では、破格の主題と呼ぶ。呼応のおかしい誤用とかたづけず、それなりの表現効果があると認め、主題と後続部分との関係に過不足があるか希薄であるという点から類型化を行っている。

- (9) 五百円硬貨の両替は、左側5番の機械で両替してください。過剰型(部が重なる)
(10)a 新聞は小銭をご用意ください 不足型(部を補う)

¹ 本稿の主題文の例文は、三上(1960)、久野(1973)、菊地(1995)、野田(1996)、及び Kurosawa(1998)による。

- b 新聞を買う方は小銭をご用意ください
 (11) このにおいはガスが漏れてるよ

漠然型

ところで、主題と述語との間に明白な格関係の対応のない主題文は、(9)～(11)のような正誤すれすれの印象を与えるものばかりではない。例えば(12)は、文として整い、定型的になってもいる。

- (12) 魚は、鯛がいい。

これは、形の上では(5)の象鼻文と同じだが、「象の鼻が長い(こと)」と同じような格関係に立つ無題文を作ることができない。菊地(1995)は、「魚は鯛がいい」「酒は日本酒に限る」「紙は再生紙を使っている」等を、主題Xが「述部に対して格関係をもたず、述部中の一名詞句Yを含むだけの」関係であることから、『包含型』という類型を立てている。言い換えれば、このタイプの主題文は、主題と述部間のつながりが格関係という文法的関係によってではなく、「鯛」が「魚」の部分集合であるという意味上の知識をもとに理解されるわけである。

2 変形生成文法での主題の扱い——「もとの形は何か」という視点

変形生成文法では、現実を表れた文にはもとの形として深層構造が存在し、文構成要素の移動によって表層文が派生する、という考え方をする。主題文も、(2)のように主題名詞句が格成分である場合には、無題文の構成要素が文頭に移動し、主題化した、と分析できる。ところが、(12)は「魚は」が移動により派生したとは説明できない。そこで、久野(1973)は、(12)では主題が深層構造の段階から主題としてそこに存在する、とした。

- (2)a この本は、太郎が書いた。 b [[この本は]_{主題} [太郎 ~~この本~~ 書いた]s]s
 (12)a 魚は、鯛がいい。 b [[魚は]_{主題} [鯛 いい]s]s

この久野の分析を発展させ、Saito(1985)は、日本語の主題文を(13)のように格助詞のついた名詞句が規範的な語順の入れ替わり(scrambling)で文頭に来ている「かきませ文」と区別した。

- (13)a [s その本₁] を [s 太郎が e₁ 書いた]] b [s object NP₁] [s e₁]]

(13)では「その本を」が本来の位置から文頭に移動したと考える。もとの文の「その本を」の位置には、移動した後に gap(e)が残る。他方、格の対応がない(12)のような主題文がある以上、日本語の主題文は、無題文中に生成された名詞句が文頭に移動して派生したものとは言えず、主題文の構造は一つだとした。

- (14)a [s その本₁] は [s 太郎が pro₁] 書いた]] b [s Topic₁] [s pro₁]]]
 (15)a [s 魚は] [s 鯛が いい]] b [s Topic₁] [s]]

主題名詞句は文頭に基底生成されると考えるので、対応する位置が後続の節の中に見当たらなくても、問題はない。移動による派生でないので、(14)の後続句の「その本を」の位置には、gap(e)ではなく、pro(空項)があると解釈する。では文構成要素の移動という大義名分のない(15)で、「魚は」と述部とはどのようにして文法的な文を構成しているのか。Saito(1985)は、格の対応によってではなく、aboutness relationによってつながっている(それにより認可される)と説明する。

3 関連性理論から見た言語表現と主題文

3.1 過不足ある言語表現

「魚は鯛がいい」のように格関係の対応のない主題文は、変形生成文法の基本的な考え方「本来の生成位置から名詞句が移動して、様々な表層文が成立する」では明快に説明ができないため、上のように扱う必要があった。この見方には、文法的な文であるならば、きちんとした格関係にもどせるもの、もっと一般的な言い方をすれば、話し手の言いたいことは、過不足なく、すべて明示的に言葉によって表される、仮に省略があっても、それは統語上の規則から復元可能である、という前提があることになる。

しかし、言語表現というものは、そうではなく、話し手の伝えようとする命題を不完全な形で言い表すのがむしろ常であり、その過不足分を聞き手が様々な形で緩めたり補ったりして理解しているのだ、というのが関連性理論² (Sperber & Wilson (1986/95), Carston (1998))の基本的な主張である。例えば、言い誤り、暗喩、皮肉等、字義通りの意味でない言語表現であっても、聞き手はちゃんと話し手の意図する意味を理解している。

その際、発話解釈の操作基準となるのが関連性という概念である。人間は、認知上自分にとって関連性のある情報に注意を向ける。また、伝達行為がはっきりとあることを伝えようとするものであれば、受け手はそこに最善の関連性があるものと期待する。ある言語的・非言語的情報が人にとって関連性があるのは、その情報が受け手の持っている文脈的想定と①相互に作用し合って文脈的含意をもたらし、②想定を裏付け、強化する、③矛盾し、退ける、のいずれかの場合である。例えば、「パーティーは遅くお開きになった (P)」という情報は、「パーティーは遅くお開きになったら成功だ(PならばQ)」という文脈的想定を受け手が持っていれば、演繹的推論によって「パーティーは成功だ(Q)」という文脈的含意を産み出し、この点で関連性を持つ。もし受け手が「パーティーは遅くお開きになった」と考えていたなら、同じ情報がその想定を裏付けたことになる。また、「パーティーは早くお開きになった」と思っていた場合は、その想定は否定され、退けられる。いずれも情報は関連性を満足させ、文脈的効果があるとされる。文脈的効果が多いほど、また処理労力が低いほど、関連性は高まる。

- (16)a. A: テレビで何をやってる? b B: 何もやってないわ。
c. (放送がないのではなく) 見たい番組が放映されていない

上の会話で答えが字義通りにではなく、話し手の意図通り理解されるのは、聞き手が呼び出しうる文脈的想定の下で関連性への期待を最もよく満たす解釈を選ぶからである。上の例で 部のように意味を補い拡充することを enrichment という。

解釈の前提となる文脈的想定が変われば、結論も変わる。昼間テレビの放送がない国へ行った日本人同士の会話なら、「何もやってない」は実際に放送がないことを発見したのだと理解されるかもしれない。この想定によって解釈が変わること、つまりある言語表現に対する前提(想定)も結論(解釈)も固定的なものでないことは、語用論的推論に特徴的な点である。

また、話し手が予期したのとは異なる文脈的想定を聞き手が持つと、誤解が起きる。「情けは人のためならず」や「転石苔を生ぜず」に新しい解釈が生まれたのは、別個の想定の下に意味を解釈した結果と言える。話し手の意図する命題は、言語記号というコードにのせて表すしかないが、聞き手はその不完全な言語表現を手がかりに、それが関連性ある情報だという見込みの下、呼び起こすことのできる文脈的想定を前提として、命題を復元するしかないのである。これが言語理解の本質である。

² 関連性理論は、認知心理学に基礎を置き、聞き手の観点から発話理解がどうなされるかを見た語用論の理論。西山(1999)に簡潔な解説がある。

3.2 意味拡充 (enrichment) と表意 (explicature)

Carston(1988)は、次の例を用いて意味拡充の概念を説明している。

- (17) a. A: How is Jane feeling after her first year at university?
b. B: She didn't get enough units and can't continue.
- (18) a. Jane didn't pass enough university course units to qualify for admission to second year study, and, as a result, Jane cannot continue with university study. 表意 (explicature)
b. Jane is not feeling at all happy about this. 推意 (implicature)

_____ : 代名詞は何を指しているか (指示付与)

_____ : 意味の一義化

_____ : 推論による意味拡充 (enrichment)

表意 (explicature) = 真偽を問うことのできる命題

(17a)の質問に対する答え(17b)は、言語記号に表された論理形式のままではなく、まず she が誰を指すか、意味のいくつかある get や unit が何を意味するのをはっきりさせなくてはならない。さらに省略された部分を推論によって補うことで初めて(18a)のように命題としての陣容を整える。この意味の補いが意味拡充(enrichment)で、こうして得られた命題(18a)を表意という。(18a)は、しかしそれだけでは(17a)の質問に答えたことにならない。聞き手は、(18a)の表意をもとに(18b)を推論によって得ることで、話し手の意図する意味を理解したことになる。この(18b)を推意(implicature)という。表意が言語インプットそのままの論理形式を展開、肉付けした命題であるのに対し、推意は表意にもとづくが、表意とは別個の論理形式を持つ命題である。また、表意は明示的伝達だが、推意は非明示的伝達である。

ところで、関連性理論では、拡充は言語コード解読によってではなく、語用論的推論によるとされる。しかし、(18a)の意味拡充部分は、すべて(16c)のように語用論的推論によって得られたものなのだろうか。語にはその求める語の範疇や文法的役割が何かという文法的情報が含まれている³。Continue という動詞には、with something, at school, in one's job, as manager などの前置詞句や動詞、形容詞が補語として続く可能性がある。この文法的情報は、意味拡充に一定の制約をもたらす、解釈の処理労力を軽減するのに一役買っている。語の持つ文法的情報は、どんなカテゴリーの語、句が求められるかを知らせるのだが、具体的に何が補われるかを定めるは、語用論的推論の役割となる。ここでは、with university study とするのが文脈的效果をもたらす解釈である。

以下、この文法的情報と語用論の相互作用という視点から、日本語の主題文の意味理解について考えてみたい。

3.3 格成分が主題である文の格助詞の復元

格関係の対応がある主題文の中で、(1)~(4)は、格成分そのものが主題になっている。無題文では規範的には格助詞が明示されるが、主題文ではガ格、ヲ格は助詞が明示されず、(3b) (4b)のようにニ格、デ格も省かれることがある。この見えない格を聞き手はどのようにして復元しているのだろうか。

3.2 で触れたように、個々の述語は、それ自体、共起する名詞句の格が何々かという情報を持っている。(2)では、動詞「書く」はガ格とヲ格の名詞句をとる。この語彙情報に照らし

³ Sperber&Wilson(1986/95:205-211)で示された基本的な考えを Kempson et al(2001)が形式意味論の立場から発展させている。また、文法的知識による予測という観点では、寺村(1987)に実験と考察がある。

合わせれば、主題文「この本は太郎が書いた」の主題は、対応する無題文でヲ格であることがわかるわけだ。これは、結合価ということとは必ずしも一致しない。ニ格やデ格などになると、それは動詞にとって必須項の格とは言えない場合のほうが多くなるからである⁴。例えば、動詞「止まる」の必須項は一つ(ガ格)だけで、他の補語がなくても文法的な文が作れる。しかし、(3b)の「この駅は特急が止まる」に対応する無題文が「特急がこの駅に止まる」だと分かるのは、「止まる」が<場所>を表す名詞と共起関係にあり、その格はニカデだが、与えられた名詞が「駅」ならニ格をとる(もし「線路上」ならデ格)ということが語彙情報として「止まる」に備わっているからである。

格助詞を復元することは、主題名詞句が無題文のどの構成要素なのかを知るということであり、主題と述部とのつながりを理解することである。コード化されていない意味を補うという点で、これも広い意味での拡充と言えるだろう。ただ、このとき復元するのは格という文法的関係であり、聞き手が頼りにしているのが語彙それ自体の持つ情報であることが(16)の拡充とは根本的に異なる点である。

3.4 格関係の対応のない主題文の意味拡充

(10)(11)(12)や以下の(21)など、格関係の対応がない場合は、3.3のように言語の持つ情報だけで拡充が行われるわけではない。(10)「新聞は小銭をご用意ください」は、駅の売店の貼り紙だという場面から、「大勢の乗客が朝夕のラッシュ時に効率的に新聞を買えるようにするには、乗客が予め小銭を用意することが必要だ」という想定が呼び起こされ、「新聞を買う方」と意味を拡充することが可能になる。(11)「このにおいは、ガスがもれてるよ」は、「ガスがもれば、においがする」という想定を呼び起こすことは容易であり、「ガスがもれているために、このにおいがしている(と話し手が伝えようとしている)」と整えることができる。(11)の主題と述部のつながりは野田が言うように漠然としてはいるが、聞き手は百科事典的な知識を動員することで、文脈的想定と文脈的効果のある解釈を得るのにさして困難はない。では、(12)はどうだろうか。

(12)魚は、鯛がいい。

(12)の主題と述部の関係は、「鯛」が「魚」の部分集合だという知識をもとに理解される、と1で述べたが、それを検証してみたい。まず「XはYがいい」という形をとる主題文には、(7)「辞書は新しいのがいい」や次の例のように、格関係にもどせるものもある。

(20) 魚は築地がいい。 築地の魚がいい。

次に、X, Yが何を指すかの知識がなければ、この構文が(12)型か(7)(20)型かの判断はできない。どちらの型でも「Yがいい」にはYを選び出すという意味があるが、この点からだけでは、XとYの関係が何なのかということは分からないからである。

(21)魚は、マヒマヒがいい。

マヒマヒが魚の名前なのか、魚の捕れる場所、売っている市場の名なのか、はたまた魚料理の店、魚料理の名人の名なのか、それを知らなければ、あるいはそのどれであるかを類推させるコンテキストがなければ、主題と述部の関係はわからず、従って文の意味も理解できない。従って、(12)は、「いい」という述語の意味、あるいは「XはYがいい」という構文だけでは理解できず、XがYを含むという知識に依存することになる。

次に、魚が鯛を含むという関係を知っていても、それで(12)の意味が確定したわけではない。仮に何のコンテキストもなく(12)を単独で聞いたとして、とられる解釈は(22a)だろうが、レストランでメニューを選ぶ際の発話なら(22b)が、また、これから料理をしようという場面でも(22c)が最も関連性ある解釈として選ばれるはずである。

⁴ これに対して、述語に対する必須項とそれ以外の付加部の区別に明瞭な一線を画することはできず、述語一項の構造は不確定なものだという主張(Marten 1999)もある。

(22) a 魚は、その中で鯛が一番すばらしい。 魚の中で、鯛が一番すばらしい。

b 魚料理は、鯛(料理)を注文しよう。 魚料理に鯛を注文する(意志表明, 二格)

c 魚料理は、鯛(料理)を素材にして作ろう。 鯛を素材にして魚料理を作る(意志表明)

ここでは、文脈的想定と言語コード情報の相互作用という語用論的推論が解釈に不可欠な役割を果たす。もう一つ、別の例を見てみよう。

(23) 物理学は、就職が大変だ。

(24) a 物理学の学生は、就職するのが大変だ。

物理学の学生が...

b 物理学の分野では就職口を見つけるのが大変だ。

物理学の分野で...

(23)の「物理学」を「物理学の学生(卒業生)」ととるか、「物理学の分野」ととるかは、想定の方で決まってくる。「言語学科の学生は卒業が大変だが」という発話に続くものなら、「物理学を卒業すると就職が難しい」という想定が最も呼び起こしやすく、関連性を持つ。

格関係の対応のない主題文で主題名詞句と後続節との間に成り立つ aboutness relation (Saito 1985) というのは、関連性理論の観点から言えば、表意(真偽を問うことのできる命題)を復元するのに語用論的推論による意味拡充が必要な関係のことだと言えよう。

3.5 ウナギ文(述語の復元)

ここまでの主題文は、述語はあっても主題との関係が明示されていないため、その関係の復元が課題だが、ウナギ文は、(27)のように述語そのものが明示されていないので、まず述語を復元することが課題となる。例えば(28)のような可能性がある。

(27) 太郎: ぼくはウナギだ。⁵

(28) a 太郎はウナギを注文する。

太郎が...

b 太郎はウナギが好きだ/嫌いだ。

太郎が...

c 太郎はウナギを釣ろうとしている。

太郎が...

(28)a-cの解釈では、述語と主題名詞句の間には、格関係がある。同じウナギ文でも、「花は桜木」のように格関係の対応のないものもある。いずれも、述語、そして次に主題と述部とのつながりを復元するのは、これまでと同様、文脈を想定し、関連性を持つ解釈をすることによる。

3.6 復元はどこまで可能か

3.6.1 文法の役割と語用論的推論

ここまでの見てきた日本語の主題文は、主題と述部との間に格関係という文法的関係がなくても拡充によって命題が復元できる、つまり理解できるものだった。それでは、復元はどこまで可能なのだろうか。主題と述部との間に何らかの開きがあるとして、それはどこまで埋めることのできるものなのか。次の例文は、新聞のコラムの(朝日新聞コラム『閑話休題 冷や汗の中の英語』1998.11.1)書き出しの文である。読み始める前に与えられた情報としては、見出しと筆者が論説副主幹だということだけで、ほかにコンテキストはない。

(29) 冬時間の米国は、話がしにくい。

さて、この主題文はどのように解釈できるだろうか。読み手として私が経験したのは、複数の解釈が可能だが、どれとも決めがたい、ということだった。その後、何人かの日本人に解釈を尋ねてみたが、皆、さあ、と首をひねり、こういう意味かもしれないけれど...と次のうち一つか二つを挙げた。

(30) a 冬時間実施中のアメリカに住んでいる人と電話で話すのは難しい。

b 冬時間実施中のアメリカについて話すのは難しい。

⁵ 久野(1978)で<省略>、野田(1996)で<破格の主題-不足型>。奥津(1978)で<ダの述語代用>。菊地(1995)で<文脈依存の「XはYだ」文>。

c 冬時間実施中のアメリカで話すのは難しい。

コンテキストが与えられていないので、それ抜きに文法的知識と百科事典的知識を総動員すると、次のような可能性が見えてくる。まず、述語「話をする」と近い共起関係にあるのは、「誰かに」「誰かと」「何かについて」などだが、これに「冬時間のアメリカ」を当てはめると、(30b)の解釈となる。「誰か」の人間の代わりに場所を用いて「北京(政府、事務所、そこに住む親戚)と話す」のように言うことはあるが、「冬時間のアメリカと話す」は意味上変則的であり、こうは言わないだろう。また、他に「話をする」と共起可能なのは「いつ」「どこで」などで、(30c)の解釈も文法的には可能である。ところが、(30b)(30c)の解釈では、それを関連性のあるものとするような文脈的想定が得づらい。(意味を成しにくい)

他方、(30a)の解釈は、文脈的効果がある(意味を成す)が、「話をする」が文法的に求めるもの以上の拡充をしないと得られない。その拡充は、日米は昼夜が逆転しており、国際電話がかけにくいという経験や知識が読み手にあり、かつ記事の書き手が取材のためアメリカ人と英語で通話しなくてはならない、という状況を想像して初めて「そういう意味かな」と考えつく類のものである。

読み手が解釈を保留せざるを得ないのは、仮に文脈的効果のある(30a)を思いついても、その通りだという確信を与えるようなコンテキストがないからである。前置きのない場合、普通は文法的に復元可能な範囲で文を作るものだが、(30a)は文法との間に大きな飛躍がある。そのために読み手は、(30a)をとるか、(30b)や(30c)をとるかのジレンマに悩むわけである。

実際には、(30a)が正しいのだが、それがはっきりするまで、さらに27行読み進まなくてはならない。この文には、文法から見た復元のしやすさと、語用論的推論のしやすさとに差があり、複数の解釈から一つを選ぶのが難しい。選べないということは、読み手が書き手に期待している関連性は十分満たされず、伝達はうまくいかなかったということである。

3.6.2 意味拡充の限界

次の(31a)は、Kuno(1973)で「主題は述部と何らかの関係があれば文法的な文が得られるとは限らない」ことの例として挙げている例である。

(31)a *US スチールは、僕のアパートの窓が汚い。⁶

b US スチールと言え、その工場から煙が出るせいで、僕のアパートの窓が汚いんだ。(31a)を(31b)の意味だとしても、そう解釈することは不可能である。たとえ聞き手に「US スチールは、鉄鋼会社で工場があり、その工場からは一日中よごれた煙が出ている。話し手は、工場の近くに住んでいる」という知識があったとしても、である。因果関係を述べているから意味が補えないのでないことは、(32a)を見れば明らかである。

(32)a. 安ワインは、頭が痛くなる。

b 安ワインは、それを飲むと、頭が痛くなる。 安ワインを飲むと、頭が痛くなる。(32a)は、格関係の対応はないが、(32b)のように拡充ができる。この拡充が難しくないのは、安ワインと頭痛との因果関係は、呼び起こしやすい、極めて一般化した想定だからだろう。(31a)のUS スチールと話し手個人の住まいの窓がきたないこととの因果関係は、(31b)のように複雑であり、たやすくその文脈が想定できるものではない。

もう一つの問題に、題述関係とは何かということがある。(31a)も(32a)も述語の性質から言って判断文(品さだめ文)だが、判断文というのは、主題名詞句の属性はこうこうだ、と叙述する性格を持つ。(32a)のほか、(3)(5)(6)(7)(8)(12)(23)などの判断文を見ると、話し手が主題名詞句の恒常的な状態、性質、くりかえし起きる事柄を述べているのが分かる。(31a)は、これに対して、US スチールという会社の性質を述べているとは考えにくい。そのつなが

⁶ Kuno(1973:254) James McCawley による例文

りは、「FUS スチールと言ええ」という程度のもので、これを題述関係ということはできないのである。これも(31a)が非文と見なされる理由である。

4 結び

主題文には、「象は、鼻が長い」のように主題名詞句と述部との間に格関係の対応のあるものと、「魚は、鯛がいい」のように、その対応のないものがある。文には、もともになる深層文があり、その成分が移動して表層文が派生する、という生成文法の立場からは、主題名詞句は、移動によって文頭にあるのではなく、本来その位置に生成したものであり、述部とは aboutness relation でつながっている、とされる。

しかし、話し手の意図した命題は、常に過不足なく、すべて言語によって明示的に表されるわけではない。語用論理論である関連性理論では、不完全な言語表現を、意味拡充することで表意(真偽の問える命題)を得ている、とする。解釈の基準となるのは、関連性という概念である。同時に、文の意味解釈には、語の持つ文法的情報(どんな範疇の語が要求されるか)が関わっており、語用論的推論との相互作用によって、主題文は理解されている。

意味拡充には、一定の限度があり、どんなに離れた関係でも聞き手に理解できるとは言えない。復元のための労力が不当に大きすぎると、それはいわゆる悪文、または非文になる。悪文、非文は、言語理解において、聞き手がどのように文法的知識と様々な百科事典的知識を使っているかを示している。

意味理解は文法的制約と語用論的推論の両面からなされる。一見、述部内に対応するものがないように見える主題名詞句も、この過程を経て、述部との関係が明らかになるのである。

参考文献

- 青山文啓(1998) 「二重主語構文と辞書」 『第10回日本語教育連絡会議総合報告書』ポルトロシュ
- 菊地康人(1995) 「「は」構文の概観」 益岡・野田・沼田編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 久野暁(1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 久野暁(1978) 『談話の文法』大修館書店
- 寺村秀夫(1987) 「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」 『日本語学』6-3 所収
- 西山佑司(1999) 「語用論の基礎概念」田窪・西山他『岩波講座 言語の科学7 談話と文脈』所収 岩波書店
- 野田尚史(1996) 「「は」と「が」」くろしお出版
- 林四郎(1998) 「日本語象鼻文のねうち」 『第10回日本語教育連絡会議総合報告書』ポルトロシュ
- 三上章(1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances*. Blackwell.
(邦訳: 武内・山崎訳(1994)『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房)
- Carston, Robyn (1988) *Implicature, Explicature and Truth-Theoretic Semantics*. In R. Kempson (ed.) 155-182.
- Carston, Robyn (1998) *Pragmatics and the Explicit - Implicit Distinction*. PhD thesis. University of London.
- Kempson, Ruth (ed.) (1988) *Mental Representations: the Interface between Language and Reality*. Cambridge University Press.
- Kempson, Ruth, W. Meyer-Viol & D. Gabbay (2001) *Dynamic Syntax: The Flow of Language Understanding*. Blackwell.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of Japanese Language*. The MIT Press.
- Kurosawa, Akiko (1998) *The 'Anaphor-less' Topic Construction in Japanese*. ms. SOAS. University of London.
- Marten, Lutz (1999) *Syntactic and Semantic Underspecification in the Verb Phrases*. PhD thesis. Univ. of London.
- Saito, Mamoru (1985) *Some Assymetries in Japanese and their Theoretical Implications*. PhD thesis. MIT.
- Sperber, Dan & Deirdre Wilson (1986/1995) *Relevance*. Blackwell.
(邦訳: 内田他 訳(1993)『関連性理論』研究社出版)